



第709号

令和6年7月23日

題字は二代真柱様

大阪市北区池田町13-17

天理教はるのひ分教会

TEL・FAX

06-6358-2630

陽気ぐらしへ学びと試み

はるのひ館



▶はるのひホームペー
142246回ロー・例
09◀聖囀聖館



『路傍講演⑫』

ここ、大阪はなんば高島屋の前をご通行中の皆さん、私たちは天理教の布教隊です。

令和八年一月に【教祖（おやさま）百四十年祭】を迎えるまでの三年千日の期間中

大阪教区三十三支部が当地において、毎日順繰りに午前十時から「神名流し」と「路傍講演」を展開しています。

天理教がめざすのは一人一人の「陽気暮らし」であり、その積み重ねとしての「陽気暮らし世界」です。

まず第一に①この世と人生は、陽気暮らしのためにあるというこの考え方は

人類の歴史上画期的だと知ってほしいのです。人権思想が進展してきた現代にあつては当たり前のように

受取られるかも知れませんが、これまででは世界も人生も、罪悪のつぐないのためとか四苦八苦は当然というような

ネガティブな考え方が、洋の東西を問わず主流だった中で、これほどポジティブ明快な言葉はありません。

とはいうものの、ではなぜ②この世に苦勞や苦難がつきものなのでしょう？

私の考えでは、それは単なる楽しさが陽気暮らしではなく、いろんな不自由や不都合をやりくりしながら

みんなの努力によつて生み出されるレベルの高い陽気暮らしが目ざされているからだと思われまます。

同じ野球でも私が子供の頃楽しんだ草野球と観客を入れて行われる野球とではレベルが違います。

後者は苦しい練習が必須です。一人一人の練習はもちろん、なおその上にチームとしての成長が求められます。

なので③単に受け身に練習させられるだけではなく、選手たちは進んで自主練習をみずからに課します。

天理教では、にをいがけ・おたすけという布教・お世話取りが大切なのはそういうわけなのです。

シリーズ

『逸話篇から学ぶ十七』

山中忠七先生③

芝 光男

教祖のご高弟で山中忠七という先人がおられました。

忠七さんは、現在の桜井市大豆越村に生まれられました。近隣に聞こえた田地持ちで、村の役職もつとめられていました。一八六二年、忠七三十六歳の年、山中家にとっては、大変つらい年でした。正月から跡取り息子が悪性のはしかにかかり、その間に三女が出直し、八月には父親が出直しました。そして九月には長女が十六歳で出直しました。その上、妻のそのが病いになりました。それは、年が明けても続きませんでした。

そこに、芝村の清兵衛さんが訪ねてきました。「庄屋敷に、どんな病気もたすけてくださる神様がいるで」と。早速、忠七さんはおちばに向かい、教祖にお

目通りすると、お言葉がありました。

「おまえは、神の深きいんねんあるをもつて、神が引き寄せたのである程に。病気は案じることいらん。すぐ救けてやる程に。その代わり、おまえは神の御用を聞かんならんで」

即座に、忠七さんは、「はい」と返事をしました。そして、こかん様から散葉をいただいて飲ませましたが、一向に良くなりません。三日が過ぎ、あきらめようとした時、もう一度とおちばに足を運びますと、

「その心を見定めようと、いろいろ手入れた」とお言葉をいただいてから、徐々に回復していった。

妻そのが回復していったのがうれしく、忠七さんは、足しげくお屋敷に通うようになりました。しかし、お屋敷の人たちの質素な食事に気づいた忠七さんは、白米を一升ずつ持つてお参りするようになりました。お屋敷では、末女こかんが、水色の縁の付いた真っ赤なフクリンの袋に白米を詰めて持つて来る忠七さんを待つていました。

こかんにとっては、「これで、今日炊く米がありませんと言わなくてもいい」と安堵したのでした。

その話を聞いた妻そのや娘のこいそは、「いつそこのこ

と、五斗俵でお供えさせてもらったら」と。

しかし、それを教祖に申し上げると、

「毎日毎日、こうして運んでくれるのありがたいのや」と、おっしゃったのです。

神様の思わくと、人の思いは、違うのです。

六月月次祭講話（要旨）

会長 芝 太郎

『元始まりの話について』

いつものように『教えの道しるべ』を一緒に読みました。今月は、「元始まりの話(要旨)」について。

この元始まりの話は、受け取り方によってはまったく荒唐無稽な話、どじょうや魚や巳(み)が出てきて、何を言っているのかさっぱり分からないと思われるかも知れません。おやさま(天理教教祖)はどうしてこんな話を、それもとても大切な話としておっしゃった

のでしようか？

ちょうど、昨日、NHKのEテレで『宗教の時間』を放映されていて、『夜と霧』の著者・フランクリンという人が紹介されていました。

ナチスによる酷いユダヤ人迫害を生き残って、なおも生きる意味について語った偉大な精神科医ですが、おやさまは人生について、意味以前に『価値』について思案するようにとおっしゃったように私は考えます。

しかし、ものの価値は作ることに初めて分かる。今では、お金を出せば何でも手に入るから、金額によつてしか価値を感じる事ができなくなった私たちです。しかも、生命や身体を私たちは一から創ることはできないから、その価値はいつそう分からず、もつたない使い方をしてしまいがちです。

そこで、せめてどんなふうにして『せかい』のち『創られ続けられているかを教えましょう、というのが、『元始まりの話』なのです。

『せかい』のち『価値』を知った上で、各自意味を見つけ、勇んで生きていきましょ。

☆お知らせ☆

☆7月26日(金) 9時 本部・月次祭

☆7月29日(月) 18時 詰所祭

☆8月4日(日) 10時 女子例会=休会

☆8月11日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしんと男子例会(詰所)

☆8月11日(日) 別席日(※一週間前の予約によって車出勤)

※別席場受付は、①午前8時～9時半 ②正午～13時半

☆8月16日(金) 10時 茶道 13時 三曲練習

☆8月22日(木) 前日準備ひのきしん

☆8月23日(金) 11時 月次祭

☆8月26日(月) 9時 本部・月次祭

◎こどもおぢばがえり 7月27日(土)

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分づくり

☆信仰とは人生観・世界観をみがきつづけること

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう！(毎月、25日までに申し込み)